

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009 ～ 2012

課題番号：21320003

研究課題名（和文） 生態学的現象学の技術哲学的展開—生態学的に優れた人工環境の構築に向けて

研究課題名（英文） Ecological Phenomenology and the Philosophy of Technology: Toward a construction of appropriate environments from an ecological point of view

研究代表者

村田 純一 (MURATA JUNICHI)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：40134407

研究成果の概要（和文）：

わたしたちの生活はつねに多様な人工環境によって支えられている。この「人工環境・内・存在」のあり方を生態学的現象学、技術哲学、生態学的心理学、さらには、認知科学や建築学などの知見を利用して解明すること、これが第一に取り組んだことである。第二に、この知見に基づいて、バリアフリーデザイン、ユニバーサルデザイン、そして、人間中心設計などの設計観の意義を明らかにし、具体的な人工物の製作過程への応用可能性を検討した。

研究成果の概要（英文）：

Our life is always supported by various artificial environments. First, we have explicated the structure of this “Being-in-the artificial environment” from a viewpoint of the ecological phenomenology, philosophy of technology, ecological psychology, cognitive science, and architecture. Second, we have explicated the practical possibility and meaning of this approach, considering the problems of universal design and human centered design.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	2700000	810000	3510000
2010 年度	3200000	960000	4160000
2011 年度	3700000	1110000	4610000
2012 年度	3200000	960000	4160000
年度			
総計	12800000	3840000	16640000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学原論・各論

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、おもに知覚経験の構

造分析に際して、現象学的観点と生態学的観
点の統合の必要性を長らく主張して、「生態

学的現象学」という見方の意義を明らかにすることに取り組んできた。この見方は、現在の心理学や認知科学、そして心の哲学の基本的枠組みを作っている脳中心の見方に対して、知覚者が身体をもって環境と相互作用するあり方に光を当てるものである。生態学的心理学者のJ・J・ギブソンは、環境内に存在するさまざまな情報を指摘することによって、「環境内存在」というあり方をする知覚経験に関する現象学的見方に、科学的基盤を提供しているということもできる。

他方で、わたしたちが今日、日常的に出会う環境はほとんどすべてがなんらかの仕方で技術的に作られた人工環境である。したがって、知覚しながら行為を制御しているわたしたちの日常経験は人工環境のあり方に大きく影響を受けているが、必ずしもその点は、注目を集めることは多くはない。この点が明確化するのには、日常経験の世界に例えば障害者が登場したり、あるいは、当たり前であった行動を改良してより合理化したりしようとする場合である。具体的にはバリアフリーやユニバーサルデザインといった設計観がこうした点を取り上げている。しかしながら、これまでの技術哲学では、技術と社会の関係を重視しながらも、多くの場合、もっぱら設計者中心に技術のあり方が考えられてきたために、具体的な使用の脈絡で生じるさまざまな問題には必ずしも十分な注意がはらわれてこなかった。

本研究は、このような日常生活を構成している知覚と行為、そして人工環境との相互作用のなかでどのようなダイナミックな関係が成立しているのか、この点を生態学的現象学と技術哲学のこれまでの知見を利用しながら明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、生態学的現象学の観点と技

術哲学の観点を統合することによって、わたしたちの日常生活を形成しているさまざまな知覚と行為のあり方を解明し、改良の可能性を探るものである。具体的には大きく二つに分かれる。

(1) 第一は理論的課題への取り組みである。生態学的現象学はおもに、知覚と行為の不可分な連関という観点にもとづいて経験構造の解明を目指すものである。他方で、技術哲学は、こうした経験に介在する多様な人工物の設計と製作のあり方を解明し、さらには、制作された人工物によって経験がどのように変化するのかを明らかにすることを課題とする。両者は密接に関係しているように思われるが、生態学的現象学の観点では、知覚者や行為者の観点が重視され、他方、技術哲学の観点では、作られた人工物の方に焦点が合わされる、といった具合に、必ずしも二つの観点を結び付けることは容易ではない。本研究の課題は、こうした二つの観点の関係を明らかにする理論的課題に取り組み、両者の観点を統合する見方を切り開くことである。

(2) 第二は、実践的課題である。現在は、設計に関して人間中心主義設計やユニバーサルデザインなど使用者中心的視点を重視する設計観が盛んになっている。この観点は、特に障害者の社会進出支援という脈絡では重要な役割を演じてきた。しかし他方で、このようなデザインによって制作された技術的人工物を配置するだけで、多くの社会的バリアーが解消されるわけではない。また、どんな技術的製品の設計の場合でも、使用の脈絡では、設計者の意図とは異なった仕方で製品が使われ、違った意味をもつ可能性があることはよく知られている。こうした点から考えると、設計者と使用者、制作者と消費者という単純な二分法を超えた設計観、技術観が求められているといえる。本研究の第二の目

的は、ユニバーサルデザインの専門家の知見を参照したり、障害者用の椅子の設計のような具体例を参照したりしながら、こうした問題にどのような解決法があるかを探ることにある。

3. 研究の方法

研究方法としては、本研究の代表者、分担者、連携研究者などを中心とした公開研究会の開催が第一である。本研究の研究分担者や連携研究者はそれぞれ、心理学、建築学、哲学、認知科学など多様な領域に属しており、そうした多様な知見からの提案をじっくりと議論する研究会が一つの柱となる。ただし、実践的な脈絡までを視野に入れるには、分担者のみでは不十分なので、内外の多様な専門家による情報提供を受けたり実地のデモンストラクションを行ってもらったりするワークショップの開催なども適宜行った。

4. 研究成果

日常的な人工環境のなかで知覚経験と行為経験を遂行する場合、通常は、一方に主体があり、他方に客体があるという静止的な二元的構図によって問題を考えがちである。それに対して、本研究では、主体と環境の創造的相互作用へと目を向けることの重要性が繰り返し確認された。

(1) 認知や行為、あるいは、人工物の設計を考える場合、主客分離を前提する二元的図式をまずは出発点とすることはやむをえない面がある。しかし実際の経験の過程は、規模の大きさ者さまさままであるが、つねにダイナミックに動いており、その動きのなかで一定の安定性を獲得する作業を実現している。これは、小さな子供がつかまり立ちを始めるときの過程にせよ、スポーツ選手が高度な技を使ってパフォーマンスを実現する過程でも同様である。西田幾多郎のいい方を使うと、

わたしたちの経験は「作られたものからつくるものへ」という創造的な過程として成立しているのである。

知覚や行為の主体としての身体にせよ、知覚や行為の相互作用の対象である環境にせよ、それらは動的な過程のなかにある存在であり、そのような観点から設計や技術についても考える必要があるというのが本研究の第一の成果である。

(2) もうひとつの成果は、知覚・感覚論に関して、色彩、照明、音などの感覚現象に関してそれらが持つ空間性を取り出すことに一定の仕方で成功した点である。特に、色のモードの違いが建築物の空間構成にとって重要な役割を演じることが、例えば、フランス・ルトロネの修道院の分析などで示唆された。色や光は独特の仕方で空間を構成するが、音に関してその空間性を明確化することは、これまで生態学的観点からもいくつか試みがなされてきたが、必ずしも大きな進展は見られていない。それに対して、本研究のなかからは、視覚に関する包囲光に対応するような聴覚に関する音響的情報の存在を示唆するような提案がなされて、今後の研究への足がかりがえられた。これらの点も、感覚現象について、伝統的な二元論の図式にはおさまらない経験構造の確認といえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 29 件)

①河野哲也, The Disastrous Lifeworld: A Phenomenological Consideration of Safety, Resilience, and Vulnerability, Philosophical Study, 査読あり, 3, 2012, 52-63

②長滝祥司, 身体・技術・世界——フィールドのなかのアフォーダンス, 思索, 査読なし, 45, 2012, 31040.

④佐々木正人, 包囲する段差と行為の発達, 発達心理学研究, 査読あり, 21, 2011, 357-368

- ⑤佐々木正人, 「起き上がるカプトムシ」の観察—環境・行為系の双創発, 質的心理学, 査読あり, 10, 2011, 46-63.
- ⑥河野哲也, The 'extended mind' approach for a new paradigm of psychology, Integrative Psychology and Behavioral Science, 査読あり, 44, 2010, 329-339.
- ⑦柳澤田実, カリス=借金帳消しのリアリズム: 福音書に対する生態心理学的アプローチ、南山神学、査読なし, 33, 201, 35-60.

[学会発表] (計 52 件)

- ①染谷昌義, プラグマティズムの言語観, 日本心理学会第75回大会, 2011/9/5, 日本大学.
- ②長滝祥司, On what mediates our knowledge of external world, The 13th Annual Conference of Phenomenology of Media, 2011/3/17, 首都大学東京
- ③村田純一, Crossing the boundary of Humanity: Enhancement technology and the free will problem, The 4th International Conference of PEACE, 2010/12/13, National Sun Yatsen University, Taiwan.
- ④染谷昌義, アフォーダンス概念とその直接知覚説の成立, 日本生態心理学会第3回大会, 2010/9/11, 京都ノートルダム大学.
- ⑤三嶋博之, 知覚システムによる不変項の発見と、実在への接近: 異種の感覚モダリティーに見られる相違と、個体間の相違をつなぐもの, 日本科学哲学会第42回大会, 2009/11/22, 高千穂大学
- ⑥河野哲也, How we can conceptualize social affordance?, 15th International Conference of Perception and Action, 2009/7/13, The University of Minnesota, USA.

[図書] (計 12 件)

- ①村田純一, Colours and Sounds: The Field of Visual and Auditory Consciousness, in ed. by Dan Zahavi, The Oxford Handbook of Contemporary Phenomenology, Oxford University Press, 2012, (共著) 158-176.
- ②河野哲也, 意識は実在しない, 講談社, 2011, 232.
- ③河野哲也, エコロジカル・セルフ: 身体とアフォーダンス, ナカニシヤ出版, 2011, 146.
- ④村田純一, The phenomenology of illumination: the ontology of vision in Merleau-Ponty's Eye and Mind, Phenomenology 2010: Selected Essays from Asia and Pacific, Phenomenology in

Dialogue with East Asian Tradition, ZETA Books, 2010, 共著 137-151.

- ⑤三嶋博之・丸山慎, 生態学的学び, 知覚と行為の相補的発展, 佐伯胖 (監修) 「学びの認知事典」, 大修館書店, 2010, 共著 423-441.
- ⑥村田純一, 技術の哲学, 岩波書店, 2009, 212.

[その他]

ホームページ等

<http://ep.human.waseda.ac.jp/groups/ecotec/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 純一 (MURATA JUNICHI)

立正大学文学部・教授
研究者番号: 40134407

(2) 研究分担者

河野 哲也 (KONO TETSUYA)

立教大学文学部・教授
研究者番号: 60384715

染谷 昌義 (SOMEYA MASAYOSHI)

高千穂大学人間科学部・准教授
研究者番号: 60422367

池上 高志 (IKEGAMI TAKASHI)

東京大学総合文化研究科・教授
研究者番号: 10211715

長滝 祥司 (NAGATAKI SHOJI)

中京大学国際教養部・教授
研究者番号: 40288436

吉澤 望 (YOSHIKAWA NOZOMU)

東京理科大学理工学部・准教授
研究者番号: 40349832

石原 孝二 (ISHIHARA KOJI)

東京大学総合文化研究科・准教授
研究者番号: 30291991

柳澤 田実 (YANAGISAWA TAMI)

南山大学人文学部・准教授
研究者番号: 20407620

佐々木 正人 (SASAKI MASATO)

東京大学教育学研究科・教授
研究者番号: 10134248

三嶋 博之 (MISHIMA HIROYUKI)

早稲田大学人間科学学術院・准教授

研究者番号：90288051

(3)連携研究者

工藤 和俊 (KUDO KAZUTOSHI)
東京大学総合文化研究科・准教授
研究者番号：10454183

柴田 崇 (SHIBATA TAKASHI)
北海学園大学人文学部・准教授
研究者番号：10454183

丸山 慎 (MARUYAMA SHIN)
駒沢女子大学人文学部・専任講師
研究者番号：60530219